

# 防災モラトリアムの実態と原因，それらへの対応について

木谷要治\*

A Study on the Moratorium about Avoid Behavior for Disaster  
and Educational Counterplan for such Moratorium

Yooji KITANI

## 目次

はじめに—本研究の動機と方法・目的—

- 1, 防災モラトリアムとは
  - 2, 学生の意識に見る防災モラトリアムの実態
    - (1) 防災意識のタイプと防災モラトリアムのタイプ
    - (2) 回答の実例
    - (3) 防災モラトリアムの原因 防災モラトリアムに陥らない者との比較から見えてくること
  - 3, 防災モラトリアムから脱却した者に共通すること  
防災教育への示唆
  - 4, よりインパクトがあり，持続的な効果が期待できる指導法はないか
    - (1) HungerfordとVolkのモデルからの示唆
    - (2) D.S.ミレティらの災害警告への反応の過程
- 結語にかえて—防災モラトリアム解消にむけて—

はじめに—本研究の動機と方法・目的—

1995年1月17日の早朝に起きた阪神淡路大震災は地震国日本にとっても大きな衝撃であった。それは、あらためて知らされた都市直下型地震の恐怖であり、また信頼し誇りにさえしていた数々の安全神話の崩壊でもあった。

しかし直下型地震の恐ろしさは、すでに1891年濃尾地震で十分に証明されていた。ところが世上市民も防災関係者も一部の人を除いてその恐ろしさを具体的に語ることはほとんど無かった。わずかに防災都市計画研究所が直下型地震において「投擲現象」が起こるといふことを1891年の濃尾地震の際の例を出して警告していた。そしてこの度神戸の町

---

\* 理科教育教室

では事実その通りのことが起こり、人々は家の中で家具やガラス器具が激しく投擲され空中に舞い、破壊され散乱し、人間を容赦なく傷つけることを見せつけられたのであった。家具やガラス器具どころか建物さえ、それも地震や火災には大丈夫と安心しきって安住していたコンクリートの建物さえも多くのものが建物全体が投擲され無惨に破壊されたのである。こういう災害にあうまでは、人々は地震災害、特に都市の直下型の恐ろしさについては全く知らなかった。濃尾地震の際の「投擲現象」、それは地震の時には、そこへ逃げろと言われていた竹藪さえもが25メートル以上も空中を飛び、一つの山の山肌全体が樹木をつけたまま焼芋の皮をはぐように山から離れて滑り落ちるといようなすさまじいものであったことが、写真で残されていたにもかかわらず、広くは伝えられていなかった。特に関西地方では、この地方には地震はないという歴史的思考の欠除ともいえる誤解が一般的であった。市民の間での誤解ならばよくあることであるが、行政当局も、この迷信を持ち、防災への備えは実に等閑に付され、神戸市のごときは、8年ぶりの防災会議が、やっと震災があってから開かれた。行政当局がこの態度であるから、市内の消防水利はいざという時、全く用をなさなかった。貯水槽の中にはひび割れたまま放置されたものもあり、猛火は自然に鎮火するのを待つしかない場合が多かった。また公共工事も一般の工事も安全は二の次で、破壊された建物や建築物からは多数の手抜き工事が暴露された状況が報告されている。これらすべての無知、油断、怠慢、不正と営利優先の結果が6000名を越す犠牲者であり、今後数年間に及ぶと言われる関西経済、いや日本経済への大打撃となったともいえるのではないか。

この度の大震災で、人々の防災への関心は一挙に高まったかに見える。実際巷の商店での防災用品は震災以前とは打って変わった売行きを見せ、乾電池、ガラス飛散防止膜、家具の転倒防止用の止め金、同じ目的のための「マグニチュード7」などは、商品がすぐに売り切れ、生産が追いつかないといい、特にマグニチュード7などは常に品薄状態である。しかし、こういう状況がある一方で、危機感らしきものを漠然と感じながらも防災の準備を一日延ばしに遷延する、あるいは全くしない、さらに中には準備に拒否的な態度をとる人間も少なくないという事実がある。木質構造の家屋が多い日本で、地震で最も恐ろしいのはその後起こる火災であることは、今回の震災でも明らかになったことであるが、その火災は、このような消火用の水さえもすぐには用意しようとしないう人間の所から起こるのではなかろうか。

筆者は、この10年くらいの間、東海大地震、南関東地震、東京湾直下型地震などの切迫が警告されてきている中で、学生諸君が実際にどの程度の防災意識を持ち実際に防災準備を実行しているかに関心を抱いてきた。過去数年間は、担当する一般教育「水をめぐる科学」で、入学時と期末試験の際に調査を行ってきた。期末試験においては、講義において、折りにふれて日本における、主として自然災害の実像と防災の原理と心得について話をした結果の定着度を見ようとしたものである。「回答の質は問わない。詳しくを評価するから、実際を正直に回答すること。またなぜそういう状況になったか、それも記せ。」とした。その結果を見ると入学時、講義開始時の回答に見る防災意識と準備の実態は極めて貧弱であり、期末の試験の際の回答を見てもあまり進歩改善の跡は少なく、ごく少数の

例外的なものを除いて、いつも驚くほどの低調さであった。今年度は、先年からの雲仙普賢岳の火砕流災害、奥尻島の地震と津波災害、さらに阪神淡路大地震と続いたから、さすがに防災の準備は充実しているであろうと期待したが、以前よりは改善されてはいたものの意外に低調であった。多くの学生は家族ともども、以前の無警戒を反省し準備を進めようという意志は示しつつも、実行はまだという状況である。そして、人間の常として意志はあるが実行はまだという状況は長く続き、ついに実行されないことが多い。筆者は、防災に関してのこの状態を「防災モラトリアム」と称しているが、本稿においてもこの実態と原因、対策について、学生諸君の回答の調査結果を中心に考察を進めたい。

## 1. 防災モラトリアムとは

モラトリアムとは、本来は金融関係の用語で「支払い猶予」という意味であるが、近年、当然とるべき行動をとらないでいる行動猶予の状態を指し、例えば「モラトリアム人間」というような言葉が精神病理学的な用語として用いられるようになった。防災に関して、知識と行動の分離の事実が非常に多く見られる現実と接して、筆者は、必要を意識はしても現実の防災準備の行動に移れないでいる状態を「防災モラトリアム」と呼ぶことにした。

## 2. 学生の意識に見る防災モラトリアムの実態

### (1) 防災意識のタイプ

筆者は、災害と防災に対する人間の態度には、大きく分けて次のような7つのタイプがあると考えられる。学生の災害についての認識と防災に関する意識を調べているうちに形成されてきた概念である。

A, 確信派：実際の経験や知識に基づく積極的な態度を示す。

B, 学識派：広く深い知識や理解に基づく積極的な態度を示す。

C, モラトリアム派：知識や理解はあるが行動にはいたらない。

D, 竹藪派：マスコミなどの影響で、漠然とした不安、心配、恐怖を感じているが、具体的な行動はできない。竹藪のようにちょっとした風でもすぐにざわめくが何もできない、何もしない。

E, さだめ派：無力感、無常感による諦めで何もしない。その時はさだめと諦める。(と称するだけ。実際にはあわてふためく。)

F, アンチ学識派：積極的無視。相手は大自然。底知れぬ大きな力で襲ってくる。どうなるものか、というふてくされたなげやりな態度。

G, 石仏派：無知による無関心で知らぬが仏の状態。

### (2) 学生の防災意識の実態

各学部の学生について、いちおう真面目に受講し、真面目にレポートを作成したと思われるもののレポートを実例として掲げる。数字はサンプル中の件数である。

[工学部]

学識派 阪神大震災を見て意識が変わり行動にうつったもの 2/13

1, 大震災の様子をテレビで見て、これを機に自分も何か対策をしなくてはならないと思った。起きてみて初めてその恐ろしさを知った。

ストロー浄水器を購入。非常食、カイロ、軍手、ナイフ、マグライト、ラジオ、タオル、ビニール袋など一つにまとめて部屋に置いてある。

2, 最も大切なのは災害に対する心構えではないか。防災用品が揃っているから大丈夫という考えでは命を落しかねない。神戸での地震を見てのんきに他人事と考えないで明日はわが身と考えていなければならないと思う。

夏のレポートの時はあまりにいい加減なことを考えていた。身の回りでは災害は起こらないと決めつけ、対策も何も考えてはいなかった。しかし、そんな考えが甘いと先生に言われ、今度の震災もあって少し考え直した。全くなかった防災用品を揃えた。懐中電灯の電池を買い、非常食を買い、押し入れから寝袋を出し、ラジオを用意し、小型バイクも買った。故郷の北海道浦河は地震のメッカである。それなのになぜあんなのんきな事を考えていたのだろう。自分の中で最も変わったのは地震に対する心構えである。

#### モラトリアム派 11/13

A, モラトリアム派ではあるが真剣で行動まであと一歩

1, 今まで恐怖や被害がどのようなものか想像できなかったため甘い考えをもつようになったものと思う。今回の災害で防災意識を改めなくてはならないと強く思った。意識が一変した。父と義兄が大阪に出張していて状況を話してくれた。災害はいついかなるところで降り掛かるか分からないという恐怖を教わった。ラジオ、懐中電灯、非常食を用意したいと思う。災害の時には自分の事で頭が一杯になってしまうのが現実だろうが、防災の用意をちゃんとしておいて、少しでも自分以外の人にも注意が配れるような余裕ある行動をとれるようにしたいと思う。

2, 実家が大阪なので近所で死者も出ており、衝撃は大きかった。母はあの地震を私にも経験させたかったという。防災意識が変わるだろうと。母は要らないものを捨て、貴重品をいつでも手の届く所に置いているという。しかし母も必要なものを全部揃えているわけではない。しかし、靴を枕元に置いて寝ているという。私は、一時は慌てたが、今は、いつか買わなくては…と思っているだけ。しかし、万が一の備えをすることは大事と思う。

3, 家族は西宮で地震災害を受けた。最も困ったのは断水で、給水車に行くにも手に持ったのはやかんと鍋。ごみ箱にしていたポリバケツに未使用のゴミ袋を入れてその中に水を入れているという。三角バケツの話聞いても、どうせ使うことは無いだろうと思っていた。しかしいざ必要という時には買えないのだ。現在不用と思われる物でも最悪の事態に備えるのが防災の基本であろう。避難袋に非常食でも用意しようか。

4, いままで防災の話聞いても何も用意しなかったが、ようやくその大切さを実感できた。カセットコンロがあるので、万一のため、予備のボンベを1, 2個用意しておこうと強く思った。ラジオも大事だろう。

5, 今まで全く関心が無かった。奥尻や東北で地震があったが関東には関係が無いことと思っていた。講義でいろいろ防災用品のことを聞いたが懐中電灯しか用意していなかった。テレビ、ラジカセが棚の上であり寝ている自分を直撃する危険があるので動かそうとした

が、部屋の事情でできない。3月に引越すのでそれまでこのままにしようと思う。阪神大震災で、最も困ったのは水、食料、寝具だったという。食料は米しかない。寝具は実家から寝袋を送ってもらう。

6, 対策としては、防災用品の常備である。カンパン、水、ラジオ、懐中電灯。しかし、現実には、缶詰、インスタント食品だけ。ラジオはまだ。

B, 知識はあるが行動まで距離がある

1, 理想は、いつも小さなバッグを携帯していて、中には、手拭、懐中電灯、飲料水、非常食、酸素ボンベ、ラジオ。家にはもっと大きなものがあって、同じ物がたくさん入っている。しかし、現実にはこれといった防災対策はしていない。部屋には手拭、懐中電灯はあるが、いざという時、役立つか疑問。実際に災害の時うまく対処できるか疑問。

〔経営学部〕

学識派 阪神大震災で意識が変わり準備を進めたもの 12/23

- 1, 阪神大震災で災害が身近なものと感じた。水、食料、懐中電灯、ラジオを一つの袋に入れてすばやく持ち出せるように常備しておくことをしようと思っている。
- 2, 理想はいろいろあるが、現実には非常食3、ミネラルウォーター3リットル、手ぬぐい。
- 3, 理想は知識としていろいろ。しかし現実には水、食料、救急薬、避難通路の確保のみ。
- 4, 非常食 通帳、印鑑、懐中電灯、水。ラジオはこれから。自分は詰めが甘いと反省
- 5, 非常食、水、着替え、タオル、常備薬、通帳、保険証、乾電池、懐中電灯、ウェットティッシュ。消火器。高い所に物を置かない。上の事は実行。ラジオはまだ。
- 6, 鞆には飴とラジオ。家にはペットボトルに水。
- 7, ①非常食、②防火と飲料のため水③避難場所の確認④家具の固定、高い所に物を置かない。ブロックや石の塀からは離れる。⑤防災の役割分担。⑥非常持ち出し品の用意⑦家を建てる時は土地をよく調べてからにする。これらの中で①③⑤⑥は実行。他はまだ。
- 8, ラジオ、懐中電灯、手拭は準備。水、非常食、家具の固定など知ってはいるがまだ。
- 9, 3日分の食糧と水は備えた。ラジオはまだ。
- 10, ①水の確保、風呂の水は抜かない。ペットボトルに水②懐中電灯③ラジオ④乾電池⑤非常食⑥お金 ①③⑤は実行。
- 11, 非常食、水、消火器は完全に実施。通帳、印鑑の確保。毛布、元栓の確認、避難場所の確認 火災の経験あり。母が出かけるとき玄関にチェックリストがはってあった。
- 12, 非常食と懐中電灯は用意。災害は事前に食い止められるもの、最小限に食い止められるもの、逃げるしかないもの、に分けられる。

モラトリアム派 11/23

A, モラトリアム派ではあるが真剣で行動まであと一歩

- 1, 阪神大震災で今までの考えが変わった。建物が瞬間に倒壊するので、行動は早くあわてた者が助かる、ということもある。今までの理想が理想ではなくなった。
- 2, 何の地震対策もしていない。今度の震災で5日位は何とかしのげるほどの水と食料は準備しなくては、と痛感。ラジオは至急買ってこようと思う。滋賀県出身なので関西に地震は無いと思っていた。

3, その時の状況に応じて, 今災害が発生したらどうすべきかを考えている。自宅以外に宿泊するときは非常口の確認。衣類・貴重品を枕元に。

B, 知識はあるが行動まで距離がある

1, 手ぬぐいを常備。全般に心構えが大事と思う。

2, 住居自体の災害への強さを考えなくてはならない。地盤, 立地条件, 工法, 建材, 安全な避難経路の有無。しかし自分が選ぶ時は余裕も知識も無かった。防災用品はこれから備えたい。

3, 食料品, ラジオ, 懐中電灯は用意し, 貴重品, 通帳, 印鑑はまとめておきたい。

4, 阪神大震災のような直下型では現状の防災心得では役に立たない。防災心得をもう一度見直す必要がある。

C, 知ってはいるが防災意識は低い。

1, 防災用品を置くスペースと金銭的余裕がない。

[経済学部]

学識派 阪神大震災で態度が変わった 6/27

1, 手拭は常時携帯, 水はペットボトルに。ラジオ, 救急箱。

2, 1月17日以前は, 前期のレポートに書いたのと同じく, ほとんど何もしていない状態であった。しかし震災以後変わった。非常食の常時携行, 手拭, カードラジオ, など。家族で防災対策についていろいろ話し合っている。家の中でもスリッパを履くことにした。

3, 非常袋, ラジオ, 靴, 10円玉, マッチ, 軍手, 懐中電灯など。

ヘルメットと非常袋は用意しているが家具の固定はまだ。

4, ①外出時の火の元の点検②消火器の場所と使い方の確認③電話をかけるときは火を止める④いつも水を用意する⑤非常袋を用意する⑥避難経路の確認

⑦たんすの上に物を置かない 実際は②④⑤⑥である。

5, 懐中電灯, ラジオ, 手拭, 救急用品 これらは揃ってはいるがまとめてない

6, 神戸で, ある雑誌のアンケートの結果, あって助かるものの第一は懐中電灯だと。私の現実には, 懐中電灯, ペットボトルの水である。

モラトリアム派 21/27

A, モラトリアム派ではあるが真剣で行動まであと一歩。

1, 今までは何も行っていなかった。家族も, 起こったらその時考えればよいと言っていた。今はいろいろ真剣に具体的に考えている。(しかし実行はしていない。)

2, 阪神大震災の3日後に現地の友人に救援物資を届けるためにいった。非常持ち出し物品を2グループに分けた。(1)は, 財布, キーホルダー, 眼鏡  
(2)は3日分くらいの水と非常食。実際にはまだ準備していない。

3, 緊急避難用具は何があってもよいように用意したい。手拭や水は用意したい。今回自分の災害に対する認識の甘さや防災対策の重要性を思い知らされた。

4, 阪神大震災では夜の寒さが最大の悩みであったという。毛布1枚でもまとめて非常用品とともに置きたい。しかし家が倒壊しては出せないなので別の方法を考える必要もある。

5, 非常食, 水などを用意したい。貴重品, 通帳はまとめておいて持ち出しやすくしてお

きたい。阪神では自動2輪が役だったというのでその用意をしたい。

6, 先日の阪神大震災で考えたことは、非常食の重要性。水も大事。カセットタイプのコンロもあった方がよい。手拭やラジオつきランプも備えておかななくてはならない。

7, 阪神大震災で、災害は自分と隣合わせということを実感した。食料、水、金を用意して置きたいと思う。寝る位置は変えた。

B, 知識はあるが、行動まで距離がある。観念論的である。

1, 阪神大震災をみて他人ごととは思えず、地震対策を考えてみた。

アパートの倒壊は確実。靴と懐中電灯を用意し毛布をかぶって逃げる。火の始末を忘れないこと。ラジオも食料もほしいが経済事情からできない。今回はふだんからやっておかないといけないと強く感じている。

2, 理想は、防災用具一式の準備と防火用と飲料用の水の用意、火災保険、地震保険への加入、手拭の常時携行。しかし実際は懐中電灯のみ。消火用の水もないし、本棚も固定していない。

3, 防災の理想については非常に詳しく具体的に記している。

(1)キャンプ用装備に地震対策用品を完全に(2)家族での話し合い 家の安全度のチェック、家具の固定、窓ガラス飛散防止フィルムのはりつけ(3)具体的な避難行動のシミュレーション。しかし実際は、全く実行していない。今横浜を地震が襲ったら、懐中電灯、ペットボトルの水、お金だけを持って逃げ回らるだろう。

4, 神戸出身。実家は家の中はめちゃくちゃ。父の会社も大被害。当分仕送りはない。懐中電灯、乾電池、ラジオは必要と思う。

C, 知識はあるが、観念論的で実際の行動まで進む防災意識は非常に低い。

1, 必要な事は二つ(1)は必要な物を揃えておくこと(2)は隣近所との日頃からのコミュニケーションをとっておくこと。(実際にいまどうしているかの記載はない。)

2, 自分はどうしても防災ということに真剣に取り組むことができない。若さがあることを過信していると気づきながらも先のことを心配することを無駄だと思う。しかし、防災についての理想はあるので、述べてみたい。

①避難場所の確認②災害時にすぐ持っていくものを用意し持ち出せる場所に確保する。③隣人とのコミュニケーションを大事にする。地域の防災訓練に積極的に参加する。④本などから知識を得る。これを機会に防災について積極的に取り組んでいこうと思う。

3, いろいろ考えているが、実際には何もできていない。

4, 防災というものに対して、その方法が何種類かあった方が望ましいと考えられる。その際に考えなくてはならないのが、行政に頼りすぎのものになってしまうということである。この点を踏まえて自分の防災について考えることにする。自分の理想とする個人的な対策としては、やはり地元の住民自治に基づいたものとなるのではないか。そのためには地域の自治というものについてもっとよく知る必要がある。そうした知識を得た上で、地域ぐるみの防災対策に積極的に参加していくのが重要な姿勢であると考えられる。個人的に日常の防災対策としては自分のふだん利用している区域や交通網をただ無意識にやりすごすのではなく、常に防災の目をもって、また被災の時にはどうした被害が

考えられるかという意識をもって接していくことが重要なのではないか。

こうしたことに対する自分の現実には、都市論や地域自治論などの関連書を読み、最悪の場合を想定した防災対策を心がけていくことになると思う。

(肝心の具体的な準備については記載無し。)

5, 防災の理想としては、一人一人が冷静さを失わないように十分な知識を身につけることである。ある実験によると、体重 270 キロの 27 才の男性が、水だけで 382 日絶食し 87 キロの標準体重に戻ったという。20 リットルの水と 20 個の懐炉があれば、閉じこめられても 1 週間は生きられるという。こういう知識だけでも知っておく価値はある。先ず知識が大事である。食料や道具も使い方次第である。知識を持ち冷静であること。これが自分の理想である。現実問題として、この根本を忘れ、物を貯えることだけを最優先にしている人が多いのではないか。

6, 阪神の無惨な光景を見て、最も大切なことは心の準備ではないか、と思った。(註：実際に神戸で、水が無いためにいかに火災に対して無力であったか、具体的な対策を講じていないためにいかに人々が惨めな状態になったかテレビで学ばなかったのだろうか。)

7, 防災について何の努力もしていないし知識もない。この知識の無さが命取りになることは知っている。理想は避難の用具の用意はもちろん非常時において冷静に行動できる知識・知恵を持つこと。幅広い知識をもつことに憧れる。今回の神戸の地震で、どこに住んでいても震災が襲いかかることが分かった。少しずつ防災の知識を身につけたい。

8, 手拭の常時携帯しかしていない。…防災なんて個人でできる範囲はごく限られていると思う。だからその地域ごとの住民の協力、あるいは行政の力がどうしても必要だと思う。学校では防災訓練が毎年行われている。あのような訓練を家庭や地域単位でも実施すべきだと思う。また災害を想定して、その時どうすべきかについて集会や講演を開くべきだと思う。そういうことを地方自治体はもっと推進すべきだし、国もそれに協力すべきだと思う。個人で大きな災害に立ち向かうことは困難である。しかし、周囲の人間のすばやい協力があれば被害はかなり減少する。あらゆる災害が起こった時に自分が何をすべきかを常に心得ていることが大切ではないかと思う。

9, 災害に対する準備は必要である。しかし、あれもこれもと準備することは、自分たちが今まで生活してきた様子を災害時にまで持ちこもうとする人間のわがままではないだろうか。ニュースを見ていると画面に若いものは出てこない。報道の偏りを感じるとともに、若者は最初に死なない限り、苦勞はしてもなんとか生活できるものではないか。

[教育学部]

学識派 阪神大震災で実際に危機意識が変わり行動を起こした 28/53

1, 前期のレポートではカバンの中にカロリーメイトだけと書いたが、阪神の地震以後は変わった。高校時代の友人が多数神戸付近に住んでいるので他人事とは思えなかった。以前は関東に大きな地震があると云われても、実感が無かったが、今回初めて現実的にそう思えるようになった。

2, 三陸はるか沖地震、兵庫県南部地震は私の意識を変えた。特に兵庫県南部の惨劇を見ると他人事ではないと感じた。家族も動きだし母が非常食を買い、私がテント、ガスバー

- ナー、ランタン、ガスボンベ、懐中電灯、食器、フライパン、などを買った。
- 3、災害は必ずあるものとして考える。実際の準備：懐中電灯、ラジオ、水と食料など枕元の箱の中に入れた。今回の災害で防災意識は高まった。
- 4、災害が起こってからで恥ずかしいが、今まで全く揃えていなかった防災グッズを買い揃えた。居住区の区役所で防災管理の状況も見てきた。
- 5、今回の阪神大震災の映像を見て、はじめて地震の本当の恐ろしさを知った。それまでの自分の無知と無防備を恥ずかしく思った。二日後に自分の理想とする防災対策をすべて行うことにして実行した。とりあえずリュックを用意し、中に懐中電灯、手拭、トランジスタラジオ、缶詰、缶切り、栓抜き、チッシュ、ライター、下着、バンドエイド、など。部屋の中の落下危険物を低い所に下ろした。寝る場所も変えた。
- 6、阪神大震災を見てから、家具の配置を変えて倒れないようにしたり飲料水の保存をしたり、懐中電灯を手近なところに置いたりしている。手拭は以前から持ち歩いている。
- 7、関西の大震災が起こるまでは防災対策はそれほどしっかりはしていなかった。しかし、新聞やテレビの報道を見て考え直した。非常食、飲料水、マッチ、救急用品などをリュックに入れた。外出に当たっては、ちょっとした非常食を持って出かけることにしている。
- 8、棚の上に物を置かないようにしている。貴重品、ラジオ、懐中電灯は用意している。
- 9、ほとんど完全な用意。(鞆には手拭、非常食、家には水、大きな鞆に毛布、カロリーメイト10箱、ラジオ付き懐中電灯、バンドエイド、ガムテープ、ぬり薬、ガーゼ、ガーゼ止め用のネット、タオル、生理用品、着替え一式、石鹸、歯ブラシ、預金通帳、保険証、印鑑など)しかし貸家であるため家具の固定ができない。
- 10、三陸はるか沖地震で青森の親戚が大きな被害を受け、災害が身近なものになり、防災意識が高まった。水の備蓄を増やし、リュックも持ち出し易いところに移した。
- 11、阪神の大震災で援助物資がなかなか届かないことを知り、日頃の防災対策の大切さが身にしみて分かり、個人として少しづつ用意し始めた。避難通路の確認、高いところのものを低い所に下ろした。大きな全身用の鏡は使わない時は寝かせている。バスタブには水を張るようにしている。水道水を数分沸騰させたものをボトルにつめている。非常食も用意した。ラジオ、靴、自転車も。
- 12、あまり熱心ではなかったが、阪神大震災以後、ポリタンク購入、家具の固定などをした。ひと事ではなくなった。水はペットボトルに3リットル。家族で避難の際の心得を話し合っている。
- 13、阪神大震災を見て、自分はどうすべきか具体的に考えるようになった。実際に準備したのは、はきやすい靴、ラジオ、1週間分くらいの水と食料、ロープ、飛び降りるときのクッションとしての布団、緊急連絡用の名簿の用意、寝る場所の変更など。
- 14、以前は気持ちだけだったが、今回の震災で防災意識と行動がかなり変わった。以前から非常食と水の常備はしていたが、いちばん大事なのは日頃の心がけだと思う。
- 15、避難場所の確認、緊急連絡先の確認、家具の固定、懐中電灯の配置は実施。非常持ち出し袋の必要を感じた。家の中に置いたのでは意味が無い。物置や車庫に。
- 16、避難用ザックは前から用意した。今度の地震で手元に懐中電灯が必要と知った。

- 17, テント, ビニルシート, 寝袋, バッテリー, ラジオ, 水 60 リットル, 燃料もガレージに。家が崩れた時の工具も。アマチュア無線の免許を持っているので連絡はできる。
- 18, カバンの中に常にキャラメルと手拭。家族で防災対策は完全。
- 19, 理想どおりには金がかかるのでできないが, 現実には, 非常持ち出しの中に, 懐中電灯, ラジオ, 缶詰, クッキー, カップ麺, 保険証, 印鑑, タオルのみ。
- 20, 印鑑, 通帳, 水, 懐中電灯, ラジオ, 医薬品, 手拭, 軍手, 非常食, 家具の固定はしていないが, 物は高く積み上げてはいない。
- 21, 今回の地震で, 援助物資が来るまでにかかなりの日数がかかることが分かったので, 備蓄の水を 1 から 2 本に増やした。非常食も菓子類, 特に日持ちのする餡を用意している。倒れやすい家具も固定している。荷物のまとめ, ラジオの用意はするべきだろう。
- 22, いろいろな準備が考えられるが, 経済的な意味で今の私には全部の実行は難しい。今の所実行しているのは, 手拭, ペットボトルの水とラジオ, 懐中電灯。実際準備の薄さを意識でカバーしたい。
- 23, 心構えについては親からしっかり言われて実行している。マグライトとラジオ, 懐中電灯は早くから用意している。
- 24, 四国出身, 友人が阪神に多数。リアルな話を聞いた。非常食も水が無いと役に立たない。火と水がある。ラジオと電池がある。救急箱, 懐中電灯, 手拭もあったほうがよい。
- 25, 災害についての認識が甘かったと思う。少しづつ水, 食料, ラジオ, 固形燃料, 下着, 生理用品, 薬品を揃えている。
- 26, 実家は奈良県で関西大震災では大きな被害は無かったものの棚の物が落ちたり揺れが大きく恐ろしかったと家族から聞かされた。とりあえず, 懐中電灯を買ってきて, ラジオ, 飲料水, 非常食も用意したいと思っているがまだ。
- 27, 理想は, ① 1 週間分の食料②鞆の中に非常食③ラジオ付き懐中電灯④カードラジオの持ち歩き⑤割れ物は安定したところに置く。今の実行は 2, 5 である。
- 28, 理想の防災用品準備は「ミニマム」と「できれば」に分けてある。
- 現実の準備は, 懐中電灯, 水, 食料, 救急箱, 運動靴など。しかもばらばらに置いてある。
- (1)水, 非常食, 貴重品, ラジオ, タオル, 下着, 水は防火用として屋外に。
- (2)母が地区の家庭防災員をしており, 非常用品一式がリュックで玄関脇に。

#### モラトリアム派 25/53

A, モラトリアム派ではあるが真剣で行動まであと一步。

- 1, 水と非常食, 懐中電灯を分かるところに置く。防災対策は不十分。静岡にいる友人に非常食を用意したと云ったら笑われた。この友人は静岡にいながら地震を気にせず, 注意しても聞く気は無さそうであった。
- 2, 考えている防災準備は, 手拭の常時携帯, ラジオ, 実際は, 懐中電灯の常時携帯 (兵庫の地震 3 日後に購入, 冷蔵庫にペットボトルに水。
- 3, 私の理想とする防災対策は, 日頃の心がけと備えの二つからなっている。心がけは 3 つある。①は, 家具の固定, ②は, まめに電気を消す, ③は燃えやすいものを火の側や家の周りに置かないこと。備えというのは, 防災用品。ラジオ, 懐中電灯, 電池, 水, 米,

レトルト食品、ビニルのバケツ、マッチ、ろうそく、タオル、医薬品。まだこれらが完全とはいえない。地方公共団体が防災対策を明確な形で打ち出し、各個人がそれに基づいて実行するのがよい。

4、理想：家は柱にほおづえ、すじかいなどを入れておく。垣根は生け垣にする。家具は固定する。スリッパは厚手の物にする。ラジオ、乾電池、懐中電灯、医薬品一式。現金。水、コンロ、など。現実には杜宅なので家具の固定はできない。水や卓上コンロは近々のうちにそろえるつもり。

5、母がラジオつき懐中電灯を送ってきた。鞆を用意して非常食と水を、またタオル、靴下を常備したい。避難場所の確認、避難経路、消火器の場所と使い方を覚えておきたい。

6、非常食と水を常時備え、貴重品をまとめ懐中電灯やライターろうそくも準備しておきたい。現実には非常食を準備し始めた。

B、知識はあるが行動まで距離がある。防災用品や準備について詳しく書かれているが実際の準備はまだという。

1、大学4年の間に関東で必ず大地震が起きると高校の先生に言われたので、地震については注意している。いままでいろいろなことを言われていたが実行していなかった。神戸の実際を見て、小さな心がけがどれだけ自分を救うか実感した。

2、水、食料、ラジオ、ライター、ろうそく、チッシュペーパー、タオル、軍手、筆記用具、救急用品、現金、通帳、印鑑、保険証などは必要という。しかし、実際には何もしていない。

3、非常食、現金、消火器の常備。頭の中ではやらなくてはと思いつつ実行ができない。

4、できる限りの防災対策をしようと思っている。日本のどこにいても地震対策は必要と思った。

5、いろいろと満点に近い防災対策。しかし、明日やろう明日やろうで先送りしている。

6、わが家の防災対策…がよいと思う。実行はこれから。

7、避難用リュックに非常食、水、着替え、懐中電灯、ラジオ、救急用品、通帳、軍手、など。家具の固定、難燃性カーテン、燃え易いものを散らかさない。実際はリュックはない。ラジオは取り出しにくい。

8、母は地震のあと2、3日だけ防災用品を買うことを言っていたが、テレビの報道が静かになるとあまり言わなくなった。防災対策のパンフレットなどを役所が配ってくれるとよいと思う。

C、知識はあるが、観念論的で実際の行動への意識は非常に低い。

1、祖母は西宮に在住。古い木造で今回の地震で完全に駄目と思ったが地盤が良かったのか無事。個人として防災の用意は何もしていない。水と食料を用意しようと思う。

2、いろいろ理想は箇条書きにできる。しかし、実際に非常袋は押入奥深くに入れてある。いざという時にどうするかという心構えは考えたことが無かったが考えてみることにする。

3、ラジオと懐中電灯の必要を今度の災害で痛感した。しかしまだ買っていない。なぜだろうか。まだ自分は災害を他人事と思っているからだろう。

4、特に対策無し。神戸と八戸の比較はしている。

- 5, メンタルな面が大事ではないかといながら具体的な準備については記述が無い。  
6, 防災については…しておきたい。防災がテーマの本を1冊読破したい。

以上、各学部とも成績は優と良の者の回答を調べた結果から実例を示したものである。成績が可以下の者の回答は、平素あまり熱心に聴講はしていないし、講義に関連しない、その場の回答では講義との関連という点で参考にならないので除外した。優と良の者の回答を調べた結果でも、なおこのようにモラトリウム派に属する回答が多く見られるわけである。

### (3) 防災モラトリウムの原因 防災モラトリウムに陥らない者との比較から見えてくること

分かっていながらなぜ準備を進めないのか。これはやはり「分かっている」とはいいながら、その認識が浅いからと考えられる。

「分かっている」ということにも、おおまかにいって、少なくとも3つの段階があるように思われる。

第一の段階は、頭で知識として知っている、一応表面的には理解しているという段階。

第二の段階は、疑問を抱いていろいろ苦心して考え確かめ、やっと納得したという段階。大脳の中の回路に深く多岐に刻印され、すでに形成され定着し、機能している認識の体系の中に位置づけられ、概念網の一部になっている段階。

第三の段階は、骨身にしみて分かっている、苦しい辛い体験を通し、脳の深いところ、原始的情動の座ともいべき視床下部などの脳幹部までも関わる深い情動を伴う全身的体験を通して、体全体が覚えて生涯忘れられない認識ともいべきものである。大きな災難や悲劇を実際に体験した場合には、いやでもこういう認識が形成される。

学生諸君の場合、実際に災害を体験せず、間接経験でしか災害を知らないわけであるから、非常に多くの諸君が、第一の頭だけの認識、それも浅い表面的な認識に終わっているのは仕方のないことであろう。こういう場合は、何か注意されてもモラトリウムの状態に留まるわけである。

知識としても与えられない場合には、モラトリウムの状態にさえ行かない場合もある。端的な例として、学生の中には、まさか無知無関心の石仏ともいべきGのタイプは見られないと思われるが、意外にいたのである。これは、大きな災害があった土地の出身者でありながら、その災害のことを全く知らないで、自分の土地は、その種類の災害からは古来無縁の土地であるという認識を持つ者で意外に多い。この原因の一つは、その土地での理科教育や社会科教育の担当者の責任ではないかと思われる。今日、小・中・高校の教師は、学習指導要領の内容の消化に追われて、郷土の自然や歴史について学ぶということの意義も必要も感じないことが多い。福井出身の学生が、防災についての質問に、「僕の古里福井は昔から災害の無い所である。無いといたら本当に無いのだ。」と書いていた。これほど確信的ではないが、北海道出身の学生が、「北海道は古来地震の少ない所で…」と書いていたりする。

雲仙普賢岳の火災流災害の後現地を訪れた筆者は、地元の島原市出身のタクシー運転手

が、町の背後にそびえる奇怪な山容の眉山の200年前の大崩壊とそれに伴う大津波、「島原大変肥後迷惑」の事実について学校では全く教わったことが無く、今度の噴火まで全く知らなかったというのを聞いた。また雲仙の火山を遠望する熊本県の海岸部の出身の大学院生も、「島原大変肥後迷惑」の事実については筆者の談話で初めて知ったというのを聞いている。宇土半島を歩いて海岸部の地元の住民に尋ねても、その事実を知らない人ばかりであった。このように郷土の災害の事実を誰からも教えられていないという事実が非常に多いのである。東京、横浜、またその他の神奈川県出身の学生も、関東大震災というものがあったということは事実としては知っているが、その詳しい状況はほとんど知らない。言葉としては頭にあるが、歴史としての災害の実像を認識として持たない。こういう市民が多いと行政も思い切った防災対策はとりにくいであろう。

郷土学習は、今日、わずかに小学校1、2年の「生活科」で、産業と交通などについて、ごく初歩的な学習をするだけである。理科で、火山、地震、台風、雨などについて学習する際にも、郷土に非常に印象的な事例があるにもかかわらず、教科書の事例を中心に急ぎ足で表面的にすませてしまうことが多いらしい。教科書の記述も、近年の教科書は、無償供与に対する大蔵省予算の制限から必然的にページ数も制限され、内容も淡泊にならざるをえず、各地の事例を詳しく紹介することなど不可能なのは当然として、ごく代表的な事例を紹介することさえ難しくなっている。それが、こういう郷土についての無知につながる。そして郷土についての無知は、また同じ災害が繰り返されることになり、こうして多くの自然災害が人災的要素を多分に持つことになる。

このような郷土の自然と災害の歴史についての無知・無関心が多いという事実は、災害について、その後一般的に学ぶ機会があっても、自分らには関係が無いことと思ひこみがちで、これが防災モラトリアムへと発展する。自分の問題として受けとめられないので、問題意識も低いので実際行動へと発展しにくいのであろう。

これに対して、自分たちの郷土の自然や歴史について何かにつけて学ぶ機会が多いと、毎日そこで生活しているだけに、自然に体が学ぶことになる。心の深層で、また体で分かるという「分かる」ということの第三段階の状態が自然に形成され本当に生きて働く学力が形成されていくのではなかろうか。

わずかではあるが、実際に着実に行動を進め、準備を充実させている者には、ある一群の共通項がある。

- ①まず答案の回答に表れるその意欲と真面目さ。
- ②着実で行動力があることが、行動の記述に表われている。
- ③身の周りの事実から学びとる習性が身についており知識が豊富で理解が深い。災害の実像を認識している。
- ④教えられたことを素直にきく謙虚な態度がある。
- ⑤実際の被災、またはそれに近い体験がある。
- ⑥自分および他人に対する説得力がある。
- ⑦家族や友人との協同の態勢がとりやすい状況にある。危機意識が共通している。

### 3, 防災モラトリアムから脱却した者に共通することー防災教育への示唆ー

- ①実際の被災, またはそれに近い体験をした。
- ②テレビで災害の深刻な映像を見て災害の現実性を実感した。深い見方をした。
- ③身近な災害体験者から具体的な話を聞いた。
- ④親や教師からの話を真面目に聞いていたところへ阪神大震災があった。

#### 防災モラトリアムからの脱却の体験が防災教育へ示唆すること

- ①人間の態度は一度や二度の話で急には変わらない。話で脅しても効果はない。実際の災害の映像を紹介すること。それにコメントする。この繰り返し。  
「霜を踏んで堅氷いたる」の言葉の通りである。
- ②防災準備は満点主義にならないこと、させないこと。
- ③先ず行動を 少しずつできることから。防災対策は一種の「おまじない」のようなものであることに気付かせること。一つ何かをすることがきっかけになり発展する。
- ④精神論だけではどうにもならないことに気付かせること。
- ⑤できるだけ災害から謙虚に学ぶ事の重大さにきづかせること。本では学べない事がある。

### 4, よりインパクトがあり, 持続的な効果が期待できる指導法はないか

#### (1) Hungerford と Volk のモデルからの示唆

Hungerford と Volk の二人は市民の環境問題に対する態度が発展していく過程を分析して段階的に捉えている。この段階的な捉え方は、防災意識の発展を捉えるにも応用できるのではないかと考え、二人の図式を防災問題に援用してみた。

#### I Entry-level

初心者レベル  
防災問題に敏感  
災害についての知識  
があり理解も深い

#### II Ownership-level

常時意識している  
防災問題について理  
解が深い  
防災問題についてか  
なり個人的に投資し  
ている

#### III Empowerment-level

常時行動型  
防災に関してとるべ  
き行動について知識  
と技能を持つ  
防災問題について迷  
いがない  
行動への明確な意志

学生の回答をみると、ほとんどがIの段階で、II, IIIは少なく、特にIIIの段階の者、常時行動型の者は非常に少ない。そしてこの段階を発展的に進めていくのは簡単なことではない。それは、次の発展に関わる要因をみると明らかになってくる。

#### (2) D.S. ミレティらの災害警告への反応の過程からの考察

先に、筆者は、ミレティらの「災害の警告に対する反応に影響する諸要因」の図式をもとに、日本人の場合についての図式を次の図のように作成した。

- A 警告の内容
  - a 明確性, 直接性, 簡潔性, 実際性, 適切性
  - b 脅威の内容と情報の信頼度の明確性
  - c 与えられた情報量
  
- B 個人の認識
  - d 過去の経験
  - e 心理的状态
  - f 社会・文化形態上の状態
  
- C 警告の認識
  - g 警告の出所 (マスメディアからか, 家族からか非公式なものか, など)
  - h 確実性の高さ
  - i 以前の災害体験
  - j 災害予想地への地理的な近さ
  
- D 警告への信頼
  - k 公的な出所から
  - l 正確で矛盾の無い内容
  - m 警告がマスメディアではなく, 個人的に伝達されること・災害発生の見込みについての認識
  - n 以前の災害体験
  - o 警告回数の増加
  - p 自然環境の具体的な変化
  - q 他者の行動 (反応の有無) への認識
  - r 集団の状況 (警告への信頼度は, 仲間集団の中にいる場合は低くなり, 家族と一緒にいる場合は高くなる)
  - s 集団内部の非公式な相互作用で警告に対する不信感が強まることがある。
  - t 災害予想地に近いほど脅威の強さの過大評価が少なくなる傾向がある。
  - u 女性は男性より警告を信じこむ傾向がある。
  - v 老人は警告に対する不信感が強い傾向がある。

E 反応 (個人または集団の対応行動)

学生の場合どこで引っかかっているか考えてみると, 上の図で d, e, f に問題があることが多い。また, g に対する不信感がある。マスコミはいつも大げさという傾向があるから額面通りに受け止めていると馬鹿をみる, といった感覚が一般的にある。防災への勧めが素直に受け入れられないことになる。

また r の要素もかなり大きい。知的な人間の集団, 頭脳集団と考えられている大学に入

学したが、防災訓練らしきものは一切無く、話題も無い。そういうことを問題にすると心配症の人間として笑い者にされるという事実さえもある。ほとんどの友人は、災害の事など心にかけて明るく楽しく振舞っている。不確定の未来に暗い予想をして用心深い自分とはかく暗い人間として見られるようで引け目すら感じる。大学の建物の中にも講義棟には消火器以外には防災対策的なものはほとんど見あたらない。研究室にはスプリンクラーや煙探知器のみである。化学の研究室などでもおびただしい薬品の瓶類の多くは、ほとんど耐震処置はなされていない。多くの書棚やロッカーは固定されていない。

こういう環境の中でも、なおめげず自主的に自宅や下宿で防災対策を実施する学生は、よほど防災に関して確信派、学識派に属する者であろう。

防災教育に当たっては、好ましい防災行動が発動するまでの過程に影響の深い a から v までの各項目について、好ましい要因は活性化し、マイナス要因はその影響を除去するように指導しなくてはならない。学生の中には、祖父母は、関東大震災の経験者でありながら、ああいうことは滅多にあることではないから、という理由で、防災対策に拒否的態度をとる、と云うものもあった。先の図での v に当たる者である。大きな地震は 100 年 200 年という単位の永いサイクルで襲ってくるものであるということを説明する必要は、こういう事情から出てくるわけである。阪神淡路大震災以後、さまざまな情報が、防災対策の必要を訴えているが、いずれも単発的で、持続的な効果を残すかどうか危ぶまれる。組織の中でシステムに沿って展開されることが望ましい。

#### 結語にかえて—防災モラトリアム解消に向けて—

震災直後は学年末の仕事に忙殺され現地の調査はできず、やっと 3 月になって現地を訪れ被災の実情を見学した。多くの被災者が避難所生活、テント生活を続けてはいたものの、交通機関もかなり復旧し被災建物の多くが片付けられ、人々の表情にも落ち着きが見られた。そんな中で筆者は、壊れた建物と壊れなかった建物がほとんど同じ場所に存在するという奇妙な光景に特に強く印象付けられた。無惨な全壊、哀れな半壊のそばに何事も無かったようにガラス 1 枚割れずひび一つ無く建っているビルや住宅の共存という奇妙な光景が少なからず目についた。内部はともかく外見だけ見てもこの地獄と天国の差ともいべきものは何から来たのだろうか。建物の破壊の原因は現在進行中の専門家の調査を待つとして、壊れなかった建物は偶然壊れなかったのではなくて何らかの防災対策がなされていたことは容易に想像できる。住宅の場合は、調査によれば、かねてより地震の多い日本の住宅として地震への備えを十分に設計と施工に加えたプレハブ住宅などはほとんど無傷で残っているということである。

実際筆者の見た範囲でもプレハブ住宅はみな健在であった。地震がほとんど無いといわれていた関西でも、まさかの時の備えを考え防災対策のコストを惜しまなかったことは、いざという時、その用心深さと投資の効果は見事に実証されたのである。この事実をしっかりと紹介し直視させ、防災モラトリアムの解消の一助にしなくてはならない。家の中のものがすべて投擲され、家の外からさえガラス窓を突き破って思いもかけない物が飛び込んでくるとか、新しい耐震基準で設計施工されたため、この度の直下型地震でも外見は全く



周囲の建物の悲惨な状況と対照的に銀行の建物はガラス1枚割れていない。



両隣の家は何事もないかのように立っているのに中の家は無惨な状況である。

損傷を受けず無傷に見える高層建築でも、内部の家具は投擲現象で文字通り乱舞ということで、ある銀行の最上階にあった頭取の部屋では350キロもある金庫が動き回り何方所も壁に穴をあけていたという。(震災直後に現地を視察し、各所の建物内部を調査した横浜国立大学工学部の村上處直教授の談話による。)このような直下型地震の激しさが語り草として伝えられるにつれ、中には、それほどの激震なら、どんな準備をしても無駄ではないか、という諦めに取り付かれて、ますます意識的に防災対策から遠ざかる人も出てくる。実際、学生の中にも率直にそういう感想を述べる者がいる。こういう者への対策も重要である。なぜならば、こういう準備皆無の人間、モラトリウム以前の人間が、二次災害、三次災害を引き起こし、さらに災害を拡大していく要因を形成するからである。

また先にも述べたごとく、今日、日本の理科や社会科の教育においては、郷土の自然や社会についての学習が軽視されている傾向がある。特に理科の場合、郷土の自然災害についての学習はほとんど行われていない。これらの結果が、関西地方には地震はないなどという間違っただ先入観を育てる基盤にもなっていると考えられる。全国に無数に存在する活断層の存在も今回の大震災で初めて世間の注目を浴びたが、これも地史的な理解を持たなければやがて忘れられるか、あるいは無用の過度の不安と恐怖のもとになるだけである。週5日制の完全実施も近く、時間はますます限られてくるが、そういう状況の中でも、郷土の自然と自然災害について学習を深めることが、防災モラトリウムの解消に最も有効な方法の一つではないかと思われる。

#### 参考・引用文献

1. Hungerford, H.R., Volk, T.L.: Changing Learner Behavior through Environmental Education  
Journal of Environmental Education, Vol.21, No.3, pp.8-18, 1990
2. ビバリー・ラファエル著 石丸 正訳 災害の襲うとき みすず書房1989より引用 原典 Milet, D.S., Drabek, T.E., and Hans, J.E., 1975 Human Systems in Extreme Environment-A Sociological Perspective-University of Colorado, Institute of Behavioral Science